

『ジョバンニの部屋』の意味するところはいったい何か
—デイビッドの自己欺瞞とアメリカ的価値観—

飯島 昭典

はじめに

レスリー・フィードラー(Leslie Fiedler)は「ホモセクシャルの葛藤」(“A Homosexual Dilemma”)の中で『ジョバンニの部屋』(*Giovanni's Room*, 1956)をメロドラマとして非難して、この作品を主にホモセクシャルという問題から扱っている。この作品において「ボールドウィンは異性愛を擁護するものとしてのピューリタニズムについて、意地の悪い皮肉を描き出している」(“Baldwin's wry ironies to portray the last stand of Puritanism as a defense of heterosexuality”)¹と考へ、アメリカ人像についてのテーマは二次的であるとしている。

I do not finally believe in Baldwin's sense of “the lack of sexual authority” in our world; but I believe he believes in it and feel the consequences of such a belief as he renders them in this book.²

ボールドウィンのこの世における「性的権威の欠乏」の感覚を私は信じていない。しかし、彼はそれを強く信じていると思うし、この本の中でボールドウィンが強くそのような信念の意義を感じ取れる。

このエッセイでフィードラーは『ジョバンニの部屋』はホモセクシャルの問題を通してアメリカ人の無垢の喪失を嘆いた作品であるとしている。しかし、注意深く作品を研究するとこの考え方は不適切である、という事に気づかされ確かにデイビッド(David)、及び恋人のヘラ(Hella)はそれぞれ苦しい経験をして違った人物となる。そして彼らは互いに無垢なアメリカ人ではなくなる。し

かし、こうした読みは少々浅はかな読みという印象を持たざるを得ない。なぜなら、主人公の自己欺瞞や宗教的な理由づけがこうした読みには考慮されていないからである。

この論文ではまず第1部でボールドウィンの考えるホモセクシャル観を、第2部で主人公デイビッドの置かれた立場を、第3部では本文中の空間のイメージを、第4部ではデイビッドの行動が宗教的裏付けを持つものである事を明らかにしてみたいと思う。この論文の目的は、この作品が単なるホモセクシャル問題を扱ったものではない事を明らかにすると同時に、アメリカ人への非難の書となっている事を指摘する事である。

1. ボールドウィンの考えるホモセクシャル観

ボールドウィンのホモセクシャルに対しての態度は両面価値的なものであり、ある時には認め、ある時には否定するといったものである。彼は「男性という牢獄」(“The Male Prison”)の中で、『マデレーヌ』(*Madeleine*)という小説の書評を行っている際、ホモセクシャルに対して次のようなコメントを行っている。

. . . and to ask whether or not homosexuality is natural is really like asking whether or not it was natural Socrates to swallow hemlock, whether or not it was natural for St. Paul to suffer for the Gospel, whether or not it was natural for the Germans to send upward of six million people to an extremely twentieth-century death.³

・・・ホモセクシャルが自然かどうかを尋ねる事は以下のような事と同じである。つまり、ソクラテスが毒人参を飲み込むのが自然かどうか、聖パウロが福音書のために殉死するのが自然かどうか、ドイツ兵が600万人の人々を20世紀最悪の死へと追いやったのが自然かどうか、を尋ねるのと同じである。

彼はこのように「男性という牢獄」の中では完全にホモセクシャルを否定しているのである。しかし、同じ問題に対して、ボードウィンとは違った場所で全く正反対の意見を挙げている。「ホモセクシャルが非難されるのは自然の理法のしるしに置いてではなく、神という名目に置いてである」(“ it is not in the sight of nature that the homosexual is condemned, but in the sight of God ”)⁴と説明を与え、ホモセクシャルを殺人犯に例えて、次のように述べている。

... is it possible not to embrace him? For he is in us and of us. We may not be free until we understand him.⁵

・・・彼を受け入れないという事があり得るだろうか。というのも彼は私たちの中にあり、一部だからである。私たちは彼を理解するまで自由になれるかもしれない。

ボードウィンはエッセイ「無垢の保護」(“ Preservation of Innocence ”)の中では、ホモセクシャルを認めているのである。

このようにボードウィンのホモセクシャルに対する態度は、両面価値的なものであるが、彼が『ジョバンニの部屋』を書いた時点では、ホモセクシャ

ルを認めている事は事実である。なぜなら、この作品がボールドウィンとルシアン(Lucien)という男性との恋愛に題材を取ったものであり、⁶ボールドウィンは自分がホモセクシャルであるという事を明言しているからである。つまり、『ジョバンニの部屋』をルシアンという実在の男性にささげる、という形を取る事によって自らのホモセクシャルを認めているのである。ここでは、彼が認めるホモセクシャルとは一体どういうものなのか、を主人公デイビッドに言及しながら明らかにしてみたいと思う。この作品の主人公が、実在の人物の投影であるという以上、主人公のとする行動がボールドウィンのホモセクシャル観に何らかの関係がある、と考えるのが妥当と思えるからである。

まず主人公デイビッドの置かれている立場を説明する。彼はアメリカでの自らのホモセクシャルに対する罪悪感に耐えかねていた。彼は10代のころジョーイ(Joey)という少年とセックスをしており、自分のそうした性癖を恐ろしい特徴と考えていた。彼は、動く事にも、友人関係にも、仕事にも、そしてアルコールが与える快楽にさえも嫌気を持つような状態にあった。そして、自分自身を発見するために自らが自由の都市と考えるパリへとやってきたのである。

作品中での主人公デイビッドの運命は不幸なものである。彼は婚約者であるヘラを失い、恋人のジョバンニ(Giovanni)を失い、そして自分自身のアイデンティティすら失ってしまうからである。彼がこのように不幸になってしまう原因はどこにあるのだろうか。はっきりとした理由として挙げられるのが、デイビッドの自己欺瞞である。彼が本当に愛しているのはジョバンニという男性であるにもかかわらず、女性を求め続ける。それがスー(Sue)であり、ヘラである。ジョバンニによって彼はその嘘を鋭く指摘される。彼は自分の純潔さと鏡を愛しているのであり、他者を愛しているのではないのである。この作品の書き出しが窓に向かう主人公の描写から始まっているが、これはデイビッドの自己欺瞞を暗示していると考えられる。ジョバンニの言葉を借りれば、デイビ

ッドは鏡を見ているのである。

I watch my reflection in the darkening gleam of the window pane. My reflection is tall. Perhaps rather like an arrow. My blond hair gleams. ⁷

私は暗い光の中で窓にうつる自分の姿を見る。矢のように細長く高い背丈、そして光り輝くブロンドの髪。

彼のこうした自己欺瞞は何につながるのだろうか。それは他者と真のコミュニケーションが取れない、という事につながる。ヘラやジョバンニとコミュニケーションが取れないのはもちろん、デイビッドは両親とですら真の心の交流を持つことができない。デイビッドは自分のホモセクシャルを嫌うが故に、男性に対して過敏な反応を示すようになる。父親の示す「男性同士の率直さ」(“masculine candor”) (21) にデイビッドは怯えて、父親の親子の溝を埋めたいという願望に対して、彼は次のような反応を示しているのである。

But I watch the merciful distance of father and son, which would have permitted me to love him. (22)

しかし、私は父と子の間に適当な距離があればいいと思った。そうすれば、自分も父を愛する事が出来たのだから。

彼が自分自身を欺かないのは夢の中である。ここに彼の本当の姿を見出すことができる。母親はデイビッドが5歳にときに死んでおり、彼は母親について

全くといっていいほど記憶がないと述べている。それにもかかわらず、彼は母親の夢を何度も見る。

. . . she figured in my nightmares, blind with worms, her hair as dray as metal and brittle as a wig, straining to press me against her body; that body so putrescent, so sickening soft, that it opened , as I clawed and cried, into a breach so enormous as to swallow me alive. (16)

・・・彼女は悪夢となり現われた。目には蛆がはい、髪は枯れた小枝のように灰色でがさついている。そして、無理やり自分の体に私を押し付けようとする。大声を挙げ、爪を立てて抵抗するが母の体は腐敗していて柔らかく、私を生きながらに飲み込んでしまうほど大きな、その裂け目の中へと取り込んでしまう。

このように夢の説明があるが、これがデイビッドの考える女性像なのである。というのも、彼は母の記憶を持っていないのであり、知っているのは女性という属性のみである。彼の女性に対する印象とは母の夢に代表されるように、醜さなのである。「無理やり押し付けようとする」、とあるがこれはデイビッドによる嫌々ながらの女性の欲求を表しているのではないだろうか。現実の世界ではデイビッドはスーとヘラという女性を自ら求めるのであり、求められるのではない。しかし、意識下、わかり易く言えば本心ではこの夢が表すように無理やり押し付けられている感覚なのである。

ホモセクシャルを軽蔑するデイビッドは必然的に自分自身に対しても自身を持つことが出来ない。それゆえ母親との関係も、父親との関係と同様にぎこち

ないものである。父親とは過剰な男性意識から、そして母親とは自己卑下から親密な関係を築く事ができない。伯母エレン (Ellen) は、デイビッドの母が話題にのぼる度に生きていた頃はとてもすばらしい女であったと強調する。しかし、伯母の話はデイビッドを不安にするだけであり、彼は息子として次のような印象を持つのである。

I felt that I had no right to be the son of such a mother.
(81)

そんなに素晴らしい母親の息子になる、そんな資格は自分にはないような気がした。

デイビッドは息子になる資格がない、と自ら母親との親密な関係を否定しているのである。ヘラ、ジョバンニ、両親という他者と心のコミュニケーションをとれないデイビッドであるが、彼はこの事によってアイデンティティを確立できないのである。アイデンティティは他者との関係によって確立するものだからである。ヘラはこの事を自らの体験によって自覚する事になる。ヘラもデイビッドと同様に自己を探しにパリへやってくる。そしてデイビッドに突然のプロポーズを受けるが、決めかねてスペインへ旅行に行く事となる。スペイン旅行から帰ってきたヘラは、デイビッドに次のように打ち明けるのである。

I began to realize it in Spain—that I wasn't free, that I couldn't be free until I was attached—no, *committed*—to someone. (120)

私はスペインでわかり始めたわ。誰かさんに愛情の絆で繋がれるまで、いえ、身を任せるまで自分は自由でなかったと。

自由になった、という彼女の言葉はアイデンティティが確立できたと解釈して間違いないだろう。というのも、ヘラはデイビッドに自分の将来を話し、夫となる人間を世話したり、食事をさせたり、自慢したりするための存在として自己を認識するからである。この認識がたとえ不安定な基盤の上に成り立っているとしても、なぜならデイビッドが裏切るから、彼女は自己を探すという迷路から自由になったのである。

アイデンティティは他者との関係において確立する、この事をデイビッドも感覚的にはとらえている。ただし、ヘラのように自覚するのではなく、ただ感じるだけである。彼はヘラという時、以下のように感じるのである。

What I wanted to suggest was that she was taking me out of desperation, less because she wanted me than I was there.
(117)

私が言いたかったのはこの事である。彼女は困ぱいから救い出してくれるが、それは彼女が私を望んでいるからというよりも、私がそこにいるという理由からである。

彼女という事によって、デイビッドは困ぱいから救われるのである。もしデイビッドのヘラへの献身が本当ならば、デイビッドはアイデンティティを確立できていたはずである。

先に述べたように、ボードウィン『ジョバンニの部屋』を書いた時点では、

ホモセクシャルを認めている。ここでボールドウィンはいかなるホモセクシャルを認めているか、という問いに答えを出してみたいと思う。ルシアンという実在の人物がデイビッドに投影されおり、そしてルシアンに捧げるという形を取っているこの作品は、ルシアンへの願望が何らかの形で表されているはずである。デイビッドに求められたのは、自己に対する正直さと、他者への真の委託である。これがボールドウィンのルシアンに対する願望であり、それが彼のホモセクシャル観を表していると考えられる。彼が認めるホモセクシャルとは何であろうか。それはアイデンティティを確立できるようなホモセクシャル、すなわち自己を欺くことなく他者に対して心の委託を行うホモセクシャルである。

2. デイビッドの苦悩

ボールドウィンの認めるホモセクシャルとは自己を欺くことなく他人に心を開くことができ、そしてアイデンティティを確立できるようなホモセクシャルである。しかし、主人公デイビッドは自己欺瞞によって他者と心の交流も持たなければ、アイデンティティも持つことが出来ない。そこには、アメリカ人としての理想と、現実の自分の姿とのギャップに苦しむデイビッドを見出すことが出来る。彼は理想と現実の溝を埋めようと努力するのである。現実近づこうとするがゆえに、自己欺瞞が生まれるのである。ここでは、デイビッドが思い描くアメリカ人とはどういったものなのかを明らかにするとともに、自己欺瞞に陥らなければならないデイビッドはいかなる苦悩に囚われているのかを述べてみたいと思う。

典型的なアメリカ人女性として登場するのがヘラである。彼女は従順にして、この上なく主人思いのしもべとなる事を望んでおり、彼女が求めるのは因習的

な結婚による安心である。彼女はスペイン旅行の最中に出会った夫婦の姿をみて、素晴らしく幸福と感じる。主人はBBC関係の仕事についており、夫人は夫にすっかり惚れ込んでいる世話女房、そして二人の間には子供がいる。こうした夫婦をヘラは素晴らしいと思い、自分もかくありたいと願って、デイビッドへの手紙の中で、この事を説明するのである。つまり、彼女が求めるのは、典型的な女性の幸せ、家庭による幸せである。ボールドウィンの言葉を借りれば次のような事を彼女は望んでいるのである。「古くからのそして普遍的な労働の分割、女は一族を養い、男はそのために戦う」(“ the ancient and universal division of labor—women nurtured the tribe, men battled for it ”)⁸。これが、彼女の望むものである。また彼女が考える愛とは「人を幸福に満たし続ける愛」(“ love to keep us warm ”)(128)であり、男女が一緒になり安心できる愛である。この事は、ボールドウィンの言う「幸せならいいという幼稚なアメリカ人的思考」(“ the infantile American sense of being made happy ”)⁹であり、アメリカ人が思い描く典型的な愛の形と考えることが出来る。以上のような理由で、ヘラはボールドウィンが作り出した典型的なアメリカ人として定義して問題ないだろう。

ボールドウィンの定義するアメリカ人は純潔さによって特徴づけられる。ヘラはゲイの集まるバー、つまり騒々しく汚らしい穴倉のような店には登場しない。そして彼女が浮かべる笑みはいつでも輝くような笑みであり、清潔、純潔に結びつく笑みなのである。主人公デイビッドの意識もアメリカの純潔性と結び付けられて描かれている。水兵をみてデイビッドは祖国を思い出すが、この白という色は伝統的に純潔性を表す色である。ここでは、大通りを歩く水兵の場面を引用したいと思う。

There was a sailor, dressed all in white, coming across the

boulevard, walking with that funny roll sailors have and with that aura, hopeful and hard, of having to make a great deal happen in a hurry. (88)

上から下まで白づくめの水兵が大通りを横切ってやってきた。水兵の御多分にもれず、体を横に揺らしながら、おかしい歩き方でやってきた。顔には急いで多くの事を片づけてしまおうとする決心と希望がうかがわれた。

上から下まで白づくめの水兵は「白石金髪で美しく」(“blonder and more beautiful”)(88)純潔さを連想させる。それゆえ、デイビッドは無意識に故郷アメリカを思い出すのである。

またアメリカン・エクスプレス社に出かけていったデイビッドはそこにいるアメリカ人の中に、彼らをアメリカ人たらしめている何か共通の資質を見出す。彼はそれがなんであるか、はっきりと認識する事は出来ないが、感じる事は出来るのである。デイビッドの彼らに対する印象は次のようなものである。

. . . They smelled of soap, which seemed indeed to be their preservative against the dangers and exigencies of any more intimate odor; the boy he had been shone somehow, unsoiled, untouched, unchanged, through the eye of the man of sixty, booking passage, with his smiling wife, to Rome. (86)

・・・彼らは石けんの匂いをまとっていたが、それは切迫した危険という名の臭気に対する予防剤のように思われた。にこやかにほほ笑んでいる妻を傍らにししながら、60にもなる男はローマ行きの切符を予約していた。そ

してその目にはどことなく汚されず、触れられず、変わらないでいる少年の面影が光っていた。

デイビッドにとって彼らは石けんの匂いをまとっている存在であり、清潔さという共通の資質をもっている人々である。60歳の男でさえ、少年のような面影を持っている。そして、彼がデイビッドに与える印象というのは何ものにも汚されない無垢な少年である。孫のいるような老婆でさえ、今まで肉体的交渉を一度も経験したことがないような顔をしており、同様に与える印象は、無垢なのである。

デイビッドの心の中でアメリカと対極に位置するのが、パリでありジョバンニの部屋である。ジョバンニの部屋は大変臭く、汚れている。そしてホモセクシャルというアメリカではタブーの場である。デイビッド自身がアメリカ人であり、純潔でいなければならないという使命感が心の中にあるので、彼はそこから逃れようとする。ホモセクシャルという性癖を持っているが故に、なおさら、デイビッドは自分の純潔性を強調しなければならない。それゆえ、彼はヘラにパリを出ることを主張するのである。

‘ I’ve been living in Giovanni’s room for months, ’ I said,
‘ I just can’t stand it any more. I have to get out of there.
Please. ’ (128)

「私はジョバンニの部屋で何か月も生活しているんだ。もう耐えられない。そこを出なければならない。お願いだ」と私は言った。

唐突にして熱っぽくパリを出ること望むデイビッドに対して、ヘラは納得が

いかない。デイビッドのようにアメリカ人のタブーを犯していないので、ヘラは純潔性を無理に意識する必要がないのである。そして彼女は、ジョバンニの部屋を出ることとパリを出ることが同じになるのがよくわからない、とデイビッドの納得がいかない様子で、返事をするのである。デイビッドが強調したがる純潔性を、彼女は理解できないのである。

以上のように、ヘラ、水兵、アメリカンエクスプレス社に集まる人々の描写と説明、そしてアメリカの対極にあるものからの逃避などによって、この作品中でのデイビッドが考えるアメリカ人、あるいはアメリカは純潔さによって特徴づけることが出来ると言える。そしてこの章で明らかにしたように、デイビッドはアメリカ人の理想にしがみつき、自己欺瞞を犯すのである。自己欺瞞を犯さなければならないデイビッドには、どんな苦悩が見られるのだろうか。

最初に気付くのはデイビッドが感じる罪悪感である。彼はジョバンニとの交際を犯罪と認めており、ジョバンニと一緒にいる間、常に罪悪感によって苦しんでいる。理由をつけてジョバンニの部屋からはなれようとするデイビッドに対して、ジョバンニは次のように非難する。

You want to despise Giovanni because he is not afraid of the stink of love. You want to *kill* him in the name of all your lying little moralities. And you — you are *immoral*. You are, by far, the most immoral man I have met in all my life. (134)

お前はジョバンニを軽蔑しているが、それはジョバンニが愛の臭気を恐れないからだ。お前は嘘をつきながら、つまらない道德の名のもとに、俺を殺したいと思っているんだ。お前は不道德だ。俺が今までであった人間の中

で、群をぬいて不道德だ。

ここでジョバンニは道徳的な理由によって交際を拒み続けるデイビッドに対して、不道德という単語を使い、一種の皮肉を行なっている。デイビッドはホモセクシャルの罪悪感から、自分はヘラを愛している、と嘘をつく。そしてジョバンニのいう純潔を愛し、清潔になりたいと願っているのである。デイビッドは「石鹸をまといながらやってきた」(“came here covered with soap”)(134) と思っており、汚れずして石鹸をまとったまま出て行ってしまいたいと考えているのである。

ジョバンニとのセックスの場面にもデイビッドが感じる罪悪感は表現されている。部屋の壁から取り外した煉瓦を片付け終えた二人は、ジョバンニの一言によって抱き合いセックスをしはじめる。デイビッドは今自分が行っている行為を次のような言葉で説明している。

And at moments like this I felt that we were merely enduring
and committing the longer and lesser and more perpetual
murder. (113)

そしてこうした瞬間には、自分はこのような感覚を持った。二人はただひたすらに耐え忍び、それだけ長く、小さく、果てしない殺人を犯しているのだと。

デイビッドによれば、ジョバンニとのセックスは殺人にたとえられている。ホモセクシャルとはアメリカ人のデイビッドにとって常に罪悪感と隣り合わせなのである。

罪悪感という自己発生的な抑圧に加えて、社会的な抑圧もデイビッドを苦しめている。ヘラが望むように因習的な結婚は、デイビッドに対して男らしさを要求するものであり、生涯男らしさという牢獄に囚われることを意味する。ヘラの名前が“hell”つまり「地獄」を連想させるのも偶然ではない。ヘラとの結婚はデイビッドのにとって地獄なのである。

また、ヘラだけでなく父親からの抑圧もある。父親は手紙の中でデイビッドに早く帰国するように促す。デイビッドは父親によると、30にも迫り勉強するには年を取りすぎている。父親は早くデイビッドが結婚して身を固める事を、望んでいるのである。父親が最も知りたいこと、つまり結婚のことは手紙の中で言及されていないが、デイビッドは書かれていないメッセージを読み取り、心の中で次のように父親の言葉をつぶやく。

Is it a woman, David? Bring her on home. I don't care who she is. Bring her on home and I'll help you get set up.
(88)

いい娘はいたか、デイビッド。家につれてこい。その女が誰であろうとわたしは構わない。とにかく連れてこい。ちゃんとやっていけるよう、手を貸してやる。

デイビッドはホモセクシャルに対する罪悪感、そしてヘラ、父親の望む因習的な結婚という抑圧、この二重の抑圧に苦しんでいるのである。この章で明らかにしたように、デイビッドにとってアメリカ人は純潔さによって特徴づけられる。デイビッドがアメリカ人であるためには、純潔でなければならない。しかし、そうすれば男らしさという牢獄に自分を閉じ込めなければならない。自

分の望む性癖に従えば、罪悪感が生じる。デイビッドは罪悪感と社会的抑圧という、内側と外側からの二重のプレッシャーに苦しみながら、自己欺瞞を続けているのである。

3. 空間のイメージ

この作品のタイトルは『ジョバンニの部屋』であり、本文の中では部屋、あるいはそれに類した閉ざされた空間のイメージが重要な働きを示している。この作品が始まるのも、主人公が屋敷の一室で窓に向かって立っている、という場面からであり、部屋という閉ざされた空間からである。本稿第1部ではポールドウィンの認めるホモセクシャルとは何かを明らかにし、そして第2部では実際に主人公が置かれてい状況を明らかにした。この章では、作品中の空間のイメージがどういった事を表しているか、を明らかにして、そしてこの場にいるデイビッドの精神状態がいかなるものなのか、を明らかにしたいと思う。罪悪感、社会的抑圧は主人公が実際に望む世界、つまりホモセクシャルの世界を捨てて、外の世界であるアメリカを意識した時に生じている。部屋という閉ざされた世界の中に置かれた主人公は、どういう状態なのだろうか。やはり、二重の抑圧、罪悪感と社会的抑圧に苦しめられているのだろうか。

まず、この作品のタイトルであるジョバンニの部屋の状況を説明したいと思う。部屋は中庭に面しており、中庭はジャングルのように、日に日に蚕食してくるような圧迫感を与える。そして床の上には埃をかぶった壁紙や汚れた洗濯物、大工道具、ペンキのブラシ、テレピン油の瓶が足の踏み場もないほど、雑然と散らかっている。部屋は市の中心部からずっと離れた所に位置し、そして電話もついていない。尋ねてくる人もジャック (Jacque) を除いて誰もいないというような部屋である。ジョバンニは窓ガラスを白い光沢剤を使って曇ら

せており、カーテンはつけていない。二つの窓ガラスは人間の目のようであり、凝視している氷と炎の目のようである、と説明している。

この部屋で支配的なイメージは閉塞と抑圧である。ジョバンニがこの部屋でどういった生活を行なっているかは、次のような説明から明らかにすることが出来る。子どもたちの声が窓の外で聞こえたり、見慣れぬ影が窓に映ったりすると、ジョバンニは次のような行動を取る。

At such moments, Giovanni, working in the room, or lying in the bed, would stiffen like a hunting dog and remain perfectly silent until whatever seemed to threaten our safety had moved away. (82)

そのような瞬間には部屋の中で何かをやっていようと、ベットに横になっていようと、ジョバンニは猟犬のように体を固くし、完全に息をひそめた。安心を脅かす何ものが過ぎ去るのを待つのだった。

彼はプライバシーが冒される危険に常に瀕しているのである。そして彼はその危険が迫ると、まるで何かに押しつぶされるかのように、身を固くするのである。中庭の説明にも蚕食という語を使い、閉塞と抑圧の状況を表している。また、この部屋の雰囲気も重苦しいものである。部屋にはわずかな光しか入ってこない。デイビッドはこの部屋の雰囲気を「処罰と悲しみの膿」(“ a matter of punishment and grief ”) (84)と表現している。

この部屋が、デイビッドの説明するアメリカと対比をなしているのは明らかである。デイビッドはジョバンニに初めて会ったとき、アメリカはどういったところなのかを、このように説明する。

‘ No one, ’ I said, ‘ who has never seen it can possibly imagine it. It’s very high and new and electric— exciting. ’ I paused. ‘ It’s hard to describe. It’s very —twentieth century. ’ (36)

「ニューヨークを見たことがない人には想像もつかないさ。高層建築が立ち並び、新しくて電化されていて」、私はためらった。「そして、ええと、活気にあふれている。説明しにくいなあ、つまり20世紀的なんだよ」

アメリカが活気に満ちて、流動性を連想させるのに対して、ジョバンニの部屋が連想させるのは、不毛性であり、非流動性である。部屋では窓が閉めきられていて、閉ざされた空間となっている。デイビッドは部屋での生活は、水の中のようなものである、と説明している。つまり、水面上、この場合世間と考えられるが、外界とは隔絶した空間であり、外の世界の動きに影響されない静止した空間となっている。

このような閉塞、抑圧、そして不毛性というイメージは同時にこの部屋に非現実性という属性を与えている。デイビッドがこの部屋で生活したのは、春から夏にかけてであるが、デイビッドはまるで一生をそこで過ごしたような思いを拭い去る事ができない。テーブルの上に置かれたバイオリンは、昨日置かれたのか、あるいは100年前に置かれたのか、それを見ただけでは、見当がつかないと彼は述べている。

外界と遮断されることによって、この部屋の中では時間という観念がはっきりしていないのである。時間という観念のみならず、この部屋の中ではデイビッド自身も非現実性を帯びることとなる。彼は部屋の中で「劇的変化」(“ a sea-change ”) (82)を経験したと述べている。彼は変化を受けるまで、自分

はアメリカ人であるというはっきりした現実を認識していたのである。この事は彼がジョバンニに会ったとき、アメリカ人ですか、と尋ねられた時、はっきりと yes と答えたことによって証明される。しかし、著しい変化を受けたというその表現によって、彼は違った自分になったことを認めたのである。彼はジョバンニにアメリカ人であると言われることに対しても、アメリカ人ではない、と言われることに対しても、両方に憤慨するようになる。彼は自分という存在に対してははっきりとした判断ができないようになるのである。

同性愛者の集まるバーについてはどうであろうか。やはり、その場もジョバンニの部屋と同様に抑圧と閉塞のイメージが支配的である。バーはトンネルのようで、薄暗く、警察の手入れの危険がある場所である。これはちょうど、ジョバンニの部屋がプライバシーの侵害の危険に常にさらされている事実と似通っている。そして、閉塞感に付随してバーの雰囲気もジョバンニの部屋と同様に非現実的なものである。この部屋の中には、常連の紳士、青年、女性、ゲイボーイとあらゆる職業、地位の人々が入り混じっている。同性愛者たちは考えられないような組み合わせで着飾り、新来者が店の中に入ってくると、ハチの巣をつついたようにはしゃぎ回る。そこは、まるで「孔雀の園」(“apeacock garden”)(30)のようであり、日常世界とはかけ離れた空間となっているのである。

タクシーという空間においても上に述べたような閉塞感、非現実性は見取ることが出来る。ギョーム(Guillaume)、ジャック、ジョバンニ、デイビットはタクシーに乗り、連れだって朝食をとりに出かける。そしてデイビットは窓から、色々な風景を目にすることとなる。中央市場には、にら、たまねぎ、キャベツ、オレンジ、りんご等の山が立ち並び、トラックがその間を行き来する。道の両側には壁に張り付くように、公衆便所、一時しのぎのたき火、喫茶店、食堂、酒場などが並んでいる。そして、もやは、川岸の樹木や石堤防を包み、

路地を覆い隠す。こうした日常のありふれた世界を、いわば現実世界をデイビットは窓を通して眺めるのである。窓によって物理的に隔離されるのみならず、現実を一歩ひいた所から眺めるというその行為によって、精神的にも現実世界から、切り離される。タクシーの外は現実であり、デイビットたちはタクシーという閉ざされた空間に乗ることにより、現実世界から切り離されているのであり、いわば非現実性の中に身を置いているのである。閉塞感については、タクシーが閉ざされた空間であるという点、あるいは、4人が無理やり「タクシーに押し込まれている」(“piled into a taxi”)(46)などの表現によって証明されるであろう。

ジョバンニの部屋、バー、タクシーとこの作品中の空間に共通の特徴は、閉塞感、抑圧、非現実性である。ここでさらにもう一つの特徴を付け加えることが出来ないだろうか。ジョバンニとデイビットが部屋の中で抱き合う場面を考えてみたいと思う。デイビットはジョバンニとの体の触れ合いの中で、次のような感覚を持つ。

I smiled and I really felt at that moment that Judas and the Saviour had met in me. ‘Don’t be frightened. Don’t worry.’

And I also felt, standing so close to him, feeling such a passion to keep him from terror, that a decision—once again!

(106)

私は微笑み、その瞬間自分の中で、ユダと救世主が邂逅したのを実感した。

「怖がるなよ、心配はいらない」彼のすぐそばに立ち、私は彼を恐怖から守らなければならない、という強い情熱を感じていた。そしてその決意が

再び一。

ここでデイビットが感じているのは穏やかな感情ではなく、ジョバンニを守りたいという強い感情である。恋愛感情をユダと救世主が邂逅したと表現している点や、決意という語を使って描写していることによってこの事は説明がつかうだろう。

またバーの中でも、デイビットは似たような感情を経験している。ジョバンニとデイビットはジャックに対して互いに意見を出し合う。ジョバンニの視線は「今までの人生で誰も、それほどの率直さを持って自分を見たことはない」(“no one in my life had ever looked at me directly before”)(39)というような錯覚を起こさせるような視線である。そしてジャックとはそんなに親しい仲ではない、とジョバンニに説明することによって、デイビットは彼に愛の告白をしているのである。デイビットはジャックから1万フランもの金を借りており、親しくないとは言い難い。ジョバンニを意識するがゆえに、デイビットはその事を否定するのである。その時の心の状態をデイビットは「この奇妙は胸の締め付け」(“this strangetightening in my chest”)(39)と表している。この感情が、決して穏やかな感情とは言えないことは、明らかであろう。

タクシーの中ではどうであろう。デイビットはタクシーの中でジョバンニに手を握られる。そして彼は手をどうしたらいいのかわからない、というような困惑したような状態に陥る。いわば、緊張した場面となっているのである。彼はタバコを探すようなふりをして、握られた手を引き離すというような行動をすると同時に、心の底でジョバンニへの愛の告白をしているのである。ジョバンニは間違いを犯していると述べる一方、次のような不安を心に持つ。

But I could not be certain, really, that it might not be
I who was making a mistake, blindly misreading everything
—and out of necessities, then, too shameful to be uttered.
(48)

しかし、本当のところ自分にはわからなかった。間違いを犯しているのは自分なのではないか。必要からすべてをすっかりごかいしているのではないか。いずれにせよ、あまりにも恥ずべき事なので、口には出せなかった。

デイビットはジョバンニとの恋愛について肯定と否定の狭間で苦しんでいるのである。ポールドウィンによれば、愛の定義は次のようなものである。

I use the word “ love ” here not merely in the personal sense but as a state of being, or a state of grace—not in the infantile American sense of being made happy but in the tough and universal sense of quest and daring and growth.¹⁰

私がここで使う「愛」という語は単に個人の意味合いだけではなく、存在の状態、幸福の状態としての愛である。幸せならいいという、幼稚なアメリカ的思考を言っているのではなく、激しくそして普遍的な探求と勇気と成長の意味において使っているのである。

この定義が作品中の空間における主人公とジョバンニの状態に非常に近い事が分かるであろう。ジョバンニの部屋、バー、タクシーでの主人公とジョバン

ニの恋愛の状態は幸せならいい、といったものではなく、緊張の上に成り立っている。そしてユダと救世主の邂逅等の表現にも見出されるように、「普遍的」(“universal”)(341)なものである。作品中の空間は、抑圧、非現実というイメージが代表的であるが、同時にそこは上で説明したような真実の愛の場となっていたのである。

4. 宗教と自己正当化

本稿1部では自己欺瞞を続けるデイビットに言及し、2部ではデイビットが理想とするアメリカ人像、3部では作品中の空間が、閉塞感、非現実の場であると同時に真実の愛の場である事を明らかにした。この章では、デイビットのそうした行動に対する判断、考え方を明らかにしたいと思う。

デイビットはジョバンニとの関係の中で、常にホモセクシャルに対して否定的な態度を示す。彼は自己弁護する形で、こういう意見を述べる。

‘ Besides, it is a crime—in my country, and, after all, I didn’t grow up here, I grew up there. ‘(78)

それにこうした事は犯罪なんだ、僕の国ではね。結局僕は、こっちで育った人間じゃない。向こうで育った人間なんだ。

デイビットにとってホモセクシャルとは、犯罪でありあってはならないものである。ジョバンニによって行動の不誠実さを非難されるデイビットであるが、彼はどうしてもホモセクシャルという犯罪に対して罪悪感を抱かずにはいられない。それゆえ、デイビットはジョバンニの部屋を出ようとするのである。第

3部で示したように、この部屋は真実の愛の場となっており、この部屋を出る事は、それを放棄する事である。作品中での空間はホモセクシャルの場となっているが、これを放棄する事はいかに間違っているかは、以下のような表現に見て取れる。

Our suitcases teetered on top of something, so that we dreaded ever having to open them. . . (83)

二人のスーツケースは何かの上に危なっかしく乗せられていた。その結果、それを開けなければならない時には、ひどく心配をしなければいけなかった。

スーツケースという空間が危なっかしい状態にある。これはちょうどジョバンニの部屋の状態と同じであり、スーツケースがデイビットとジョバンニの恋愛に例えられているのである。この事は、スーツケースがジョバンニの部屋に置いてある点、そして部屋とスーツケースのどちらも閉ざされた空間という属性を持っている点、こうしたことから推測する事ができる。開けようとすれば落ちてしまいそうな、このスーツケースのように、閉ざされた空間を壊したとき、二人の恋愛も終わり、落下するのである。つまり、ジョバンニの死刑という悲劇を生む事となるのである。

また、デイビットがジョバンニの部屋をいよいよ出ようとする時、ジョバンニは閉められた窓を開けデイビットに何かを悟らせようとする。デイビットはジョバンニに寒いから閉めてくれ、と答える。ジョバンニは、それぞれに生きる空間がある事を悟らせようとしたのである。生きるべき空間の外は、冷たい風が吹く世界であり、冷酷、悲惨な世界である。人それぞれに住むべき空間が

ある、という考え方はジョバンニとデイビットの会話の中に出てくる。不満を漏らすデイビットに対して、ジョバンニは次のような事を言い始める。

The world is full of rooms—big rooms, little rooms, round rooms, square ones, rooms high up, rooms low down—all kinds of rooms! (112)

世界は部屋であふれている。大きい部屋、小さい部屋、丸い部屋、四角い部屋、天井が高い部屋、低い部屋、ありとあらゆる部屋だ。

作品中での空間が真実の愛の場であるとするならば、このジョバンニの発言は、世界にはいろいろな形の恋愛が存在している、という旨の発言と捉えることができる。デイビットはジョバンニの部屋という空間での恋愛を拒絶し、別の恋愛、ヘラとの恋愛を選ぼうとするのである。

ジョバンニとの生活を拒絶するデイビットは、自分が起こした行動を正当化しようとする。ジョバンニの死刑執行後、デイビットの取る行動は愛の行為、つまりセックスだけである。彼はその行為をどういうわけか、朝にしかすることができない。デイビットはジョバンニとのセックスを汚れたものと考え、ヘラとのセックスをジョバンニと同じ条件下では行いたくないのである。彼は朝という神聖な条件でセックスを行う事によって、自分がヘラという事を正当化しようとしているのである。

第2部では、作品中でのデイビットによるアメリカ人像は純潔、無垢で特徴づけられる事を示した。デイビットは自分がアメリカ人である、という理由で、アメリカでタブーの同性愛を拒絶し、ジョバンニを拒絶したことを正当化する。この自己正当化の裏には、宗教的な理由づけが隠されているのは、注目すべき

ことである。ジョバンニを失ったデイビットは、鏡の前に立ち、次のような独り言を述べる。

I move at last from the mirror and begin to cover that nakedness which must hold sacred, though it be never so vile, which must be soured perpetually with the salt of my life. I must believe, that the heavy grace of God, which has brought me to this place, is all that can carry me out of it. (159)

私はついに鏡から立ち去り、体を覆い始める。たとえこの体がどんなに汚れていても、自分は神聖であると考えなければならない。そして、それを自らの命の塩で不断にすり磨かなければならない。私は信じなければならない。この地へと連れてきた神の厳粛な恩寵だけが、自分をこの場所から運び出す事のできるものだと。

あくまでも自分自身は神聖であると考えており、そしてジョバンニの部屋を出ることも神の意志によるものだと、デイビットは説明している。デイビットは、自分の行動を神の名を借りて、正当化しているのである。上の引用部分が自己正当化にすぎないという事は、作品の冒頭のデイビットと比べてみれば明らかである。デイビットは、自己を発見したいと自分の意志でパリ行きに乗ったのであり、それを自覚しているのである。ジョバンニに人間には意志がある、と説明しているデイビットの例が、この事を明らかにしている。デイビットはジョバンニに時間は水でもないし、人魚も魚ではない、選ぶことができる、と熱く語る。作品の終末部分と冒頭部分では、明らかにデイビットの考え方に違いが見られる。終末部分では、行動は神によるものだと語り、冒頭部分

では意志によるものだと語っているのである。つまり、デイビットはジョバンニの死刑に対して、神の名を借りながら、自己正当化をしているにすぎないのである。

ヘラとの別れ話の中にも、デイビットについての宗教による自己正当化を見出すことが出来る。デイビットとジョバンニについて真相を知ったヘラは、大変なショックを受けて泣き出す。そして、デイビットは以下のような言い訳をするのである。

‘ Hella. Hella. One day, when you’re happy, try to forgive me ’ (155)

「ヘラ、ヘラ、君がいつか幸せになった時、僕を許してくれないか」

ここでデイビットは、自分が他人を不幸にした罪深い人間であると認めているかのように見える。しかし、ここでデイビットは、自己犠牲というキリストの概念を念頭においているのである。ヘラは自分と別れて幸せになるという想定がデイビットの中にあり、自分は犠牲者だと考えているのである。心からの謝罪であるならば、許してくれという言葉は出てこないからである。ヘラの幸せのために、自分は彼女との結婚をあきらめる、そして彼女が幸せになった時、自分は許される。この構造は自己犠牲、救いというキリストの概念と同じなのである。デイビットが彼女のために思って別れたのではない事は明らかである。なぜなら、彼は最後まで執拗に彼女に結婚を迫るからである。デイビットはもし自分が嘘をついていたとしても、それは自分に対しての嘘であり、ヘラに対しての嘘ではない、というようにヘラを引き留めようとしているのである。ヘラとの関係が修復不可能と悟って、上のような発言が出たのである。デイビッ

トはこの発言においても、宗教による自己正当化を行っているのである。

こうした宗教によって自己正当化するデイビットに対して、著者はどのような判断を下しているのだろうか。ヘラと別れたデイビットは一人街をぶらつく生活を送るようになる。ボールドウィンは、デイビットが捨てた生活、すなわちジョバンニとのホモセクシャルの恋愛が、真実であった事を暗示的に示している。デイビットがジョバンニの死刑を知らせる手紙を受け取った箇所がこの説明に適當であろう。

. . . I take the blue envelope which Jacques has sent me and tear it slowly into many pieces, which watching them dance in the wind, watching the wind carry them away. Yet as I turn and begin walking toward the waiting people, the wind blows some of them back on me. (159)

・・・私はジャックからきた青い封筒を取り出し、ゆっくりと切れ切れに引き裂く。それらは風の中で踊り、はらはらと風に吹き払われていく。しかし、私が向きを変えてバスを待つ人たちの方へ歩き出すと、風はその紙切れのいくつかを自分の方へと吹き戻してくる。

ジョバンニを死んだものとしてあきらめ、自己を宗教によって正当化するデイビットであるが、深層心理ではジョバンニとの恋愛を忘れていないのである。舞い戻ってくる紙切れがこの事を暗示している。この結末が決してデイビットにとって、幸福なものではない事は明らかであろう。自己を発見しにパリへやってきたデイビットであるが、ヘラを失い、そしてジョバンニを失う。心のコミュニケーションを取ることが出来ずに、他者を通して自己を確立する事が出

来ないのである。ただ、ジョバンニの面影を追うだけである。デイビットが志した自己を発見するという望みは、かなえられなかったのである。

この章ではデイビットの自己欺瞞が宗教による自己正当化に基づいている事、そしてそうした行動に対する著者ボールドウィンの判断は、否定的である事を示した。この事を踏まえて、結論にむすびつけたいと思う。

結論

アメリカにおいて、宗教が大きな影響力を持っている事は、周知の事実である。国家の社会構造の基盤をなしているのはもちろん、アメリカ人の深層心理に深く影響し、行動規範も形作っているのである。そもそも、アメリカという国の成立がピューリタニズムという背景を持っている点からも、この事は十分にうなづける事実である。ボールドウィンの作品も宗教色を帯びているものが、少なくない。三部作と言われる『山に登りてつげよ』(Go Tell It on the Mountain, 1953)、『もう一つの国』(Another Country, 1962)、そしてここで扱った『ジョバンニの部屋』も宗教が重要なモチーフとして表れている。

ボールドウィンの作品群に置いて宗教が問題とされる理由については、上で述べた社会環境に加え、幼い頃の経験が影響を及ぼしているようである。ボールドウィンは14歳の時、教会でシスターに足をかけられ、そして他の黒人の子供がそうされたように、ひどい言葉で罵倒される、という経験を持つ。彼はこの頃から偽善と不公平が社会のみならず、宗教に置いても存在するのを知っており、後にアメリカ的な宗教観に対して、疑問の声を挙げるのである。¹¹

この作品『ジョバンニの部屋』は、主人公デイビット、フィアンセのヘラ、そして恋人のジョバンニという三人をめぐる恋愛物語となっているが、結果的にデイビットは自らの選択により、破滅の道を歩む事となる。その大きな原因

として挙げられるのが、宗教を代表とするアメリカ的価値観なのである。デイビットは宗教による自己欺瞞を行い、幸福を手に入れる機会を逃してしまう。アメリカ的純潔思考に固執し、それを捨てきれなかったのが、原因である。デイビットが執着するアメリカ的純潔思考、この場合、アメリカ的宗教観とって問題ないと思われるが、それは人間的成長の機会を与えるどころか、それを奪い取り、主人公を不幸へと導いてしまうのである。この点に置いて、『山に登りてつげよ』の主人公ジョン(John)とは正反対の境遇に置かれるわけである。

これまでの説明から、この作品が単にホモセクシャル問題を扱ったものではない、という事が明らかになったはずである。ここで扱われているのは、アメリカ的価値観についてである。純潔という価値観に翻弄され、自分を失ってしまうデイビットを通して、その価値観に疑問を投げかけた作品になっているのである。人間的成長の糧となるはずの宗教が、ここでは妨げとなってしまっている。アメリカ人にとって身近なピューリタニズムという宗教、それゆえ何も疑問を持たず盲目的に従ってしまいがちなこの宗教に対して、警鐘を鳴らしているのである。そして、本稿の序で述べたように、この作品は、ピューリタニズムを特徴とするアメリカ的価値観に対して何の疑問も持たないアメリカ人に対して、告発の書となっているのである。

ゴールドウィンは、アメリカにおいてホモセクシャルであり、しかも黒人である、という特別な立場に身をおいた人間である。それゆえ、アングロサクソン系プロテスタント、WASP が気づかなかった自国の問題を鋭く描き出す事に成功したのかもしれない。仮に『ジョバンニの部屋』を単なるホモセクシャル問題として読んだとしても、この作品はホモセクシャルの人権が確立されつつある現在、時代を先駆けた作品であり、社会的影響力を持った作品とって問題ないだろう。『山に登りてつげよ』、『もう一つの国』と比べると、『ジョ

『バンニの部屋』は作品の重要性からみると、一段下に見られる事が多いようである。しかし、ここで明らかにした作品のテーマを考慮に入れるならば、『ジョバンニの部屋』は前作にも劣らない意味をもってくるだろう。また、ここには示さなかったが、ボールドウィンのエッセイストとしての才能、そして小説家としての彼の詩的な文体は、魅力あふれるものであり、今後の研究のあらたな視点となりうるであろう。

注

1. Leslie A. Fiedler, “ A Homosexual Dilemma ” in *Critical Essays on James Baldwin*, ed. Fred L. Standley and Nancy V. Burt, Massachusetts: G.K. Hall and Co. , 1988, pp.148-49.
再度、この書からの引用があるが、再び注に示す事とする。
2. Fiedler, p.149.
3. James Baldwin, “ The Male Prison, ” *Collected Essays* by James Baldwin, ed. Literary Classics of the United States, New York: The Library of America, 1988, p. 232.以下、同書からの引用はすべて注に示す。
4. Baldwin, “ Preservation of Innocence ” in *Collected Essays*, p. 596.
5. Baldwin, “ Preservation of Innocence ” in *Collected Essays*, p.596.
6. David Leeming, *James Baldwin*, New York: Alfred A Knopf, 1994, p.127. 同書からの再度の引用も注に示す。
7. James Baldwin, *Giovanni's Room*, London: Penguin Books,

1990, p.9. 以下『ジョバンニの部屋』からの引用は同書による。

8. Baldwin, “ Freaks and American Ideal of Manhood ” in *Collected Essays*, pp.815-6.
9. Baldwin, “ Down at the Cross ” in *Collected Essays*, p.341.
10. Baldwin, “ Down at the Cross ” in *Collected Essays*, p.341.
11. Leeming, p.25.

引証資料

Baldwin, James. *Collected Essays*, Ed. Literary Classics of the United States. New York: The Library of America, 1998.

— — —. *Giovanni's Room*, London: Penguin Books, 1990.

Leeming, David. *James Baldwin: A Biography*, New York: Alfred A. Knopf, 1994.

Fiedler, Leslie A. . “ A Homosexual Dilemma ” in *Collected Essays on James Baldwin*. Ed. Fred L. Standly and Nancy V. Burt. Massachusettes: G. K. Hall and Co. , 1988.